

# せながむじ

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第九号（毎月一日発行）  
平成二年六月一日

## 古平の地名

近藤 芳二

### 十五、沖町

#### ラルマキ・ラルマニ

明治二十五・二十九年の地図では、沖村になっている。  
武四郎日誌では「ラルマキ」「ラルマニ」となっている。  
永田地名解では「ラルマニ・方言オンコと云フ此地ノアイヌハ、（ラルマキ）になまル、元禄郷帖（ザルマキ）ニ誤ル今沖村ト云フハ（オンコ）ヨリ転ジタル辞ナリ。「ラルマニ」ハ（オンコ）から転じたといわれている。

### 十六、チャラセナイ

#### チャラツナイ

豊浜トンネルの開通で車窓からは見えないが、旧道を通ると岬のトンネルを出た所で崖から滝が落ちてゐる。この滝がチャラツナイで、アイヌの時代から余市と古平の境界であった。  
永田地名解では、チャラセナイ、現在はチャラツナイに統一されている。

山田氏の「北海道の地名」で

「ローソク山石」

「——その海中にラフソク岩と呼ばれる海の牙がある。多年の風浪にさらされてやせ細った感じだが、頭部は観音に似てすそもその聯想を補う。セタカムイラインの掃途、車を馳らせながら、同行の水野幸徳校長に

は、（チャラチャラ音をさせる・川）の意としてゐる。  
※明治の頃まで、この滝の下にしん番屋が数軒あり、滝の左側に崖を削った道があり、上が干場であった。

### 十七、その他の地名について

歌棄・チャラツナイ間に次のような地名が記録されている。

●再航えぞ日誌

歌棄——ソニマ——フロノフ——ラフセ——タン子ヘシホ——チャツナイ

●明治二十九年の五万分の一

地図  
歌棄——ホツケマ——ハナタラシ石——ヤマナカ——フ〇ワ

提案した。

「海の観音と呼んだらどうです。沖村の真ん前にあるから、沖の観音と改名してもいいですね。」  
「そう思えば観音様に似ている。」  
車窓から涼しい潮風が吹きこむ。——略——  
吉田一穂「海に降る雪」より

シーツルノツベ——アットレス——セタカムイ岩——タケコシ——チャラツナイ

以上は海岸線に点在する地名で、二つの資料で重複している場合もある。また、海岸に国道ができて当時の形がうしなわれてしまったので、調査が困難である。

明治二十五年の二十万分の一の地図では、古平の各川筋の地名は次の通りである。

古平川筋 十五

歌棄川筋 三・沖村川筋 三

このように古平町には、未解明のアイヌ語地名が多いことに気がついた。——以下次号——

△7月の山出木市

■古平青年団を中央・潮陵二青年団に分立する（延十五年）

■NHKがラジオ放送を開始し町内でも聴取する（昭和三年）

■山口金治所有の借案園で公園祭りを行い賑わう（四年）

# 故郷を想う

福井幸三

私は、若い人が大好きです。また、若い人に好かれたいと思う。「昔は……」とか、自慢話にならぬよう常々気をつけている老人のひとりなんだが……？さて、原稿を依頼されて引き受けてはみたものの、物忘れで有名な私のこと、なかなか筆も

進まないうちにとうとうここまで来てしまった。「忘れるのも才能のうち」とか、誰かに教えられたような言葉だよなあ……。いつか神山さんの銭湯に三、四人で行った時のこと。脱衣籠のパンツをはいて、気分よく長椅子に腰を下ろして友達の出でくるのを待っていたら、ゾロゾロと、みんな風呂から上がって来た。そしたら誰かが、

「あれっ、おれのパンツが無  
いよ。」

と、大声を出して探していた  
が、僕のパンツを見て、

「それ、おれのだよ」

誰であろう、それはスキー仲間  
の川内さんだった。

参ったなあ、おれは――。

「仲間に免じて、もっと小さ  
い声で言いよお」と、言ったか  
どうかは忘れたが……。

そしてスキーに行けば、帽子  
手袋、ゴーグルなど次々と忘れ

## 古平スキーの廿日話 ―― その一 ――

るので、どこへ行っても忘れ物  
があるときまって、

「ああ、それは福井さんのだ  
よ。」

と、誰かれとなくそつと持つ  
て来てくれる。有り難きは仲間  
よ。感謝、感謝。

だが、何年も前のパンツの話  
を今も堂々と紹介されるのには  
閉口だよ。みんなには、おれの  
ように忘れるという才能が無い  
のかなあ……。 (以下次号)

## 古平町経済大ピンチ (昭和十年)

昭和五年、鯨漁の大凶漁以来  
町経済は大打撃を受け、すけそ  
漁も薄漁が続き、町民一般は疲  
弊困ばいその極に達していた。

昨年は水田も冷害で大凶作。  
その上、暴風雨、波浪により海  
岸線が甚大な被害を受け、町で  
は「経済更正計画」をたてた。

その中の「報謝日の設定」の  
項に、次のようなことが実行細  
目として掲げられている。

「魚類供養日の設定：毎年四  
月十三日の全国水産デーを七月  
十三日に繰り下げて行うこと。

当日は、漁業家より米ぬかを  
一俵宛寄贈してもらい、これを  
海中の適当な箇所沈下するこ  
と。古船に米ぬか、石、柴等を

積んで沈下し、魚礁築設をなす  
こと。当日は、各寺院順番に僧  
侶により魚類の供養を行い、漁  
業に関する各種の催し物をする

が、本年は、小学校主催の水産  
展覧会当日とする。

(昭和十年十二月・同委員会が  
設置された時の資料による)

■ 禅源寺に句碑のあるホトトギ  
ス同人野村泊月来町 (五年)

■ 佐上北海道庁長官が来町、借  
楽園の溪山荘で昼食 (八年)

■ 古小高等科生徒百五名が函館  
に修学旅行をする (同年)

■ 武田典町長が家庭の都合によ  
り辞職をする (十年)

■ 古平・美国・余別・入舸の四  
か町村が余市／古平間の自動  
車道路建設について道に陳情  
をする (同年)

■ 古小保護者会が役員会で公設  
グランド (現中島グランド)  
について協議し、旧競馬場跡  
を適地とする (一一年)

■ 浜町郵便局の上棟式で餅まき  
をする (十二年)

■ 中島グランドの整地が完了し  
修抜き式を行う (同年)

■ 船入潤建設のため児童や町会  
議員・一般町民が砂利採取に  
労力奉仕をする (十五年)

■ 余市町のりんこの袋掛けに勤  
労奉仕隊が動員 (十七年)

■ 琴平神社で勤労報国隊の結成  
式を行う (十八年)

■ 一級・二級町村制が廃止にな

泣いた 学校の火事  
「運動会云にホンモノの鉄砲」

本間 銀 朔

大正十二年（一九二三年）四月、新地分教場に入学をした。

新地分教場は現在の藤沢商店の裏通りの山側にあつて、一年生と二年生が通う、二学級の小さな学校である。入学した年の十一月十一日の昼、付近の民家から出火して学校に燃え移り、

見ている前で学校が焼失してしまつた。火事後、受持だつた伊藤源吾先生が家財道具を運んでいるのを見て、同級生二、三人で泣いた記憶がある。延焼を防ぐのか、石倉の窓を閉め味噌を厚く塗っているのを見た。

学校が焼けたので、次の日からは浜町の本校に通つたが、翌月、ちょうど丸山の麓に建設中だつた分教場が完成したので、そこに通うことになつた。旧高校の建物があつた場所で、一年生から四年生まで四学級の分教場で、ここに四年間通つた。

運動会は本陣の干場で、本校

の生徒と合同で行われた。浜町方面へ行くのは教科書を買に行ぐぐらいで、当時の本屋さん、現在の④斎藤洋品店の近くにあつて、米田さんという店であつた。

運動会会場の干場は、当日初めて見るのだが驚いた。宝海寺に向かつて左側の道路には、小屋掛けをした売店がたくさんあつた。

大 漁 餅

網下ろし祝いの口取りには、きまつて大きな餅を来客や漁夫一同のお膳に付けた。

昔、北海道ではまだ水田が無く、本州から運ばれて来た糯米は特に高価で、餅はなによりのご馳走であつた。餅さえあれば、たとえ外のは貧弱でもよかつた。

起 縁 場 鯨

り、見物人も大勢いて賑やかであつた。

競技の合図は紙玉のピストルではなく、本物の鉄砲（※村田銃）を使って空砲を撃つたのである。ドーンという音があまりにも大きくて、徒競走の時などは耳をふさいで走つたことを覚えてゐる。徒競走の順番は後ろから数えた方がはやかつた。

※村田銃・日清戦争前から使われていた陸軍の制式小銃で、猟銃としても使われていたといふ。

「おらア若い時だば、

網下ろしにみかん三つが五つ付けどもんだども、そのじぶんにかみかんでばめんずらしがったからなア——」

鯨合同会社ではこの伝統？を破り、大漁餅のかわりに赤飯を付けたところ、「これだば、チョンマゲのねエ相撲取りだべエ」と、言われた。

（同年）

■小樽航路の貨物運送船長栄丸が、高島沖で沈没し全員が死亡する（十九年）

■古平消防団設置条例が制定され警防団が解散（二十二年）

■古平町弘報条例が制定され第一号を発刊する（二十六年）

■古平・余市・岩内間の鉄道敷設請願が、国会運輸委員会で議決される（二十七年）

■古平中学校第一期工事が竣工し高校も移転する（同年）

■新地分校が危険校舎に認定されたので、児童を本校に収容する（二十九年）

■東京大相撲の東富士一行が興業、勸進元桐沢定吉（同年）

■自衛艦「ばら」「ふじ」が入港一般公開をする（三十四年）

■NHK「この声百万ドル」を古平劇場で収録（三十四年）

■札幌・美国間を定期観光バスが運行する（三十五年）

■古平町役場では公文書の横書きを実施する（三十六年）

■廻り淵橋が竣工し渡橋式を行う（三十九年）



# 自然に恵まれた海遊び

石塚 実

昔の思い出としては、浜育ちの我々には何といっても、夏の日の浜遊びが一番だろう。

夏休みに入る前から、風さえ良ければ海に行ったものだ。よく行ったのは、①の浜と、丸山の陰の十三曲がりのあの崖道を下りた所で、「トマルサン」と大人の人たちが言っていた浜。ちようど、今の丸山トンネルを出て群来町の方へ寄ったあたりだった。

新地町を上がった所から、水天宮という社がある所に行く坂道を登り、観音様のある所まで細い畑の道を行くと、そのお堂の裏側のあたりから十三曲がりの道があった。

昔、鯨の獲れていた子どももの頃、鯨の刺網をさすのに春は番屋を建て、漁期中、この十三曲がりの下りた右側の所で暮らし

ていた。夏は、新地町で暮らしていたので、その間はほとんど空き家のものであった。その浜から玉石のつづく浜を飛び歩くようにして、浅瀬の広い浜に着く。そこでは、ゴモ（ホンダワラ等）の中を歩いて、足探りでガンゼやノナを採ることができた。浜に着けば、すぐ焚き火の支度をする。波で打ち寄せられた板切れや枯れ木等々を集める。そして、取って来たばかりのガンゼ・ノナ・アワビと、家から持って来た葱やいも、ささげ等を入れて浜鍋がかけられ、泳いだ後にそれらを食べては楽

た。夏は、新地町で暮らしていたので、その間はほとんど空き家のものであった。その浜から玉石のつづく浜を飛び歩くようにして、浅瀬の広い浜に着く。そこでは、ゴモ（ホンダワラ等）の中を歩いて、足探りでガンゼやノナを採ることができた。浜に着けば、すぐ焚き火の支度をする。波で打ち寄せられた板切れや枯れ木等々を集める。そして、取って来たばかりのガンゼ・ノナ・アワビと、家から持って来た葱やいも、ささげ等を入れて浜鍋がかけられ、泳いだ後にそれらを食べては楽

## 治・正・昭の風雪に耐えて

関口八郎さん宅の、特徴ある屋根に気付かれた方は居られるだろうか。

玄関に向かって左側の屋根は二層になっているが、クリの木のみさでふいている。クリは腐れ難いのでみさとしても使われていた。しかし、クリから出るタンニンで釘が錆びやすかった

しみ、日陰になるのが早い崖下の浜なので、二時頃だったろうか、また、浜づたえに十三曲がりに向かう。

楽しかった浜遊び、そして、遊び疲れてなんとなくけだるい思いで、うねうねと続く道を登ったことを今でも思い出す。

現在、丸山トンネルを出て、あの十三曲がりの道のあった崖を見ても、何十年も経て土砂崩れのためか、もうすっかり跡かたもない。ただ、子どもの頃の友達や浜遊び、浜鍋の味と共に思い出の中に浮かんでくるだけとなった。

ので竹釘を打ったが、その竹釘作りは職人の夜なべであったという。（水見八郎さん談）

関口さんでは裏山のクリの木でみさを作らせそれで屋根をふいたが、さすがのクリも寄る年波には勝てずトタンにふき代えることになった。だが左側の屋根だけはその上にトタン屋根を載せたので、現在のような二層になったというわけである。

■秦洋丸が丸山岬沖で座礁、排水作業により無事（四十年）

■五選した「伊藤町長を励ます会」が開かれる（四十一年）

■高浜虚子の来道を記念し、全道ホトトギス大会を古平文化会館で開く（同年）

■アユ稚魚五万尾を昨年に続き古平川に放流する（四十二年）

■第一回古平町住民の生活実態調査を行う（四十三年）

■古平局内がダイヤル式直通電話になる（四十四年）

■古平町野球スポーツ少年団を結成する（四十五年）

■町民を対象にした古平町開発大学開校式を行う（四十六年）

■佐々木孝泰、勲五等瑞宝章受賞記念祝賀会（四十九年）

■花の木幼稚園で交通安全運動として「こぐまクラブ」を結成する（同年）

## あとがき

共感を寄せてくださる方が増えて喜んでおります。次は、「あなたが登場」してくださることを心からご期待しております。